

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿

寺崎修

自由党の役員名簿が、すでに昭和三十年、佐藤誠朗・原口敬明・永井秀夫の諸氏によってその紹介が試みられて⁽¹⁾いるのに比較して、同党の役員名簿ならびに大会出席者名簿の復元は、かならずしも十分ではなく、⁽²⁾それは、自由党史研究を進める上で、大きな障害となつていゝるといつても過言ではない。

本稿は、このような状況にかんがみ、自由党の全期間（明治十四年十月—同十七年十月）の役員の名、ならびにその間に開催された六回の党大会⁽³⁾出席者の氏名をこれまで筆者が蒐集しえた資料によつて復元を試み、これを整理、一覽表にまとめたものである。本資料の紹介が、わが国最初の全国的政党である自由党の今後の研究に、多少なりとも役立つとするならば、筆者として、大きなよろこびである。

(1) 佐藤誠朗・原口敬明・永井秀夫「自由党員名簿」(昭和三十年)。

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

(2) 従来、これらの名簿については、「自由党史」（明治四十三年）に掲載されているそれによるはかはなく、同書に漏れている部分（たとえば明治十六年四月定期大会で選出された幹事名、同大会出席者氏名など）のほか、補訂すべき部分も、ほとんど不明であった。しかし、近年、断片的ながら右の弱点をおぎないうる資料が紹介されつつあることは、まことによるこぼしい（たとえば、稲田正次「国会期成同盟の国約憲法制定への工作・自由党の結成」・明治国家形成過程の研究・昭和四十一年・一〇二頁—一〇五頁、日比野元彦「明治十四—十五年自由党の動向について——自由党本部報の紹介を中心として——」・社会科学研究・第五号・昭和五十四年三月・三三頁以下、安在邦夫「自由党本部報——福島県耶麻郡・三浦雄助氏所蔵文書より——」・福島史学研究・復刊第三二、三三合併号・昭和五十六年十一月・四五頁以下、大日方純夫「ある民権家の回想——斉藤壬生雄と『自由党史』——」・歴史評論・第三八七号・昭和五十七年七月・六五頁以下、安在邦夫「自由党結党後の党組織化の動向」・早稲田大学大学院文学研究科紀要・第二八輯・創立百周年記念号・昭和五十八年三月・二八七頁以下、江村栄一「自由党史研究のために——自由党本部報道書の紹介をかえて——」・神奈川県史・各論編1・昭和五十八年七月・一九一頁以下、などは、その代表的なものといえるだろう）。

(3) その間に開催された党大会は、(一)明治十四年十月十八日から同月二十九日まで東京井生村楼で開催された結党大会、(二)明治十五年六月十二日から同月十九日まで東京井生村楼で開催された臨時大会、(三)明治十六年四月二十三日から同月二十四日まで東京井生村楼で開催された定期大会、(四)明治十六年十一月十六日に東京井生村楼で開催された臨時大会、(五)明治十七年三月十三日に東京井生村楼で開催された臨時大会、(六)明治十七年十月二十九日に大阪太融寺で開催された解党大会、の六回である。

(一) 自由党役員名簿

	結党時の役員 ⁽¹⁾ (明治十四年十月結党大会)	第一回役員改選 ⁽²⁾ (明治十五年六月臨時大会)	党内抗争後の補充人事 ⁽³⁾ (明治十五年十月)	第二回役員改選 ⁽⁴⁾ (明治十六年四月定期大会)	第三回役員改選 ⁽⁵⁾ (明治十七年三月臨時大会)
総理 (一名)	総理 (一名)		総理 (二名)	総理 (一名)	

定員	總理	副總理	諮問	常議員
副總理 (二名) 常議員 (若干名) 幹事 (五名) 常備委員 (二〇名)	板垣退助	中島信行		馬場 辰猪 末広 重恭 大井憲太郎 竹内 綱 大石 正巳 林 和一 北田 正董
諮問 (二名) 常議員 (七名) 幹事 (二名) 常備委員 (不明)	板垣退助	後藤象二郎		馬場 辰猪 大石 正巳 末広 重恭 林 和一 大井憲太郎 北田 正董 竹内 綱
同上	板垣退助			林 和一 大井憲太郎 北田 正董 竹内 綱 島本 仲道 片岡 健吉 林 包明
常議員 (二〇名以上 三〇名以下) 幹事 (二名)	板垣退助			星 亨 谷 重喜 中島又五郎 大井憲太郎 内藤 魯一 吉村 明道 西山 志澄 森脇 直樹 鈴木 舍定 鵜飼 節郎 山際 七司
諮問 (若干名) 幹事 (二名) 常備委員 (若干名)	板垣退助	星 亨 大井憲太郎 (明治十七年五月辭任) 片岡健吉		

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿 (寺崎)

幹 事	
林 包明 山際 七司 内藤 魯一	
鈴木 舎定 （中途辭任） 宮部 襄 林 包明 （鈴木の後任）	
宮部 襄 林 包明 （中途辭任）	
前田 兵次 ^{（道）} 加藤平四郎 齊藤壬生雄	松村文次郎 石坂 昌孝 吉野 泰造 新井 章吾 塩田 奥造 宮部 襄 長坂 八郎 杉田 定一 小林 樟雄 堀越 寛介 園田 勇 三宅 秀夫 山脇 鋭郎 吉原次郎八 山口千代作 磯山清兵衛 沢田 寧
杉田 定一 （中途辭任） 加藤平四郎 佐藤 貞幹	

	大石 正巳 (林 正明) 柏田 盛文	常備委員 長坂 八郎 八木原繁社 吉田鶴四郎 森 隆介
	山際 七司 長坂 八郎 森脇 直樹	河野 広中 佐藤 貞幹 志内 一雄 深尾 重城 内藤六四郎 加藤平四郎 前田 兵次 齊藤 圭次
	山際 七司 長坂 八郎 森脇 直樹	河野 広中 佐藤 貞幹 内藤六四郎 加藤平四郎 前田 兵次 齊藤 圭次
小林 樟雄 (杉田の後任)	鷗飼 節郎 鈴木 昌司 大井憲太郎 (明治十七年五月辭任) 内藤 魯一 小林 樟雄 高橋 基一 森脇 直樹	

(1) 明治十四年十月に制定された「自由党規約」によって、党役員は、総理(一名)、副総理(一名)、常議員(若干名)、幹事(五名)、常備委員(一〇名)によって構成されることになった。そして、常備委員以外の役員は、「大会議」で「公撰」され、また、常備委員は、「地方」において「撰出」(ただし、第一期常備委員は公選)されることになった(第二章、第一四章)。実際の役員選挙は、十月二十九日に実施され、その結果、総理には板垣退助、副総理には中島信行、常議員には馬場辰猪、末広重恭、後藤象二郎、竹内綱が、幹事には林包明、大石正巳、山際七司、林正明、内藤魯一が、それぞれ当選した(「朝野新聞」・明治十四年十月三十日付、「自由党史」・岩波文庫版・中巻・八四頁)。しかし、それから十日後の自由党集會条例違反自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

事件勃発時の役員構成をみると（拙稿「明治十四年・自由党集會条例違反事件の一考察」・近代日本史の新研究Ⅳ・昭和六十年・四四頁以下参照）、右の役員のうち、幹事に選ばれたはずの林正明が柏田盛文に入れかわっており、林正明が実際に幹事に就任したかどうかは不明である。また、常備委員については、「自由党本部報」第一報、第八報の記事によって、長坂八郎、八木原繁祉、吉田暢四郎、森隆介の四名がこれに選ばれたことがわかるが（安在・前掲「自由党本部報——福島県耶麻郡・三浦雄助氏所蔵文書より——」・福島史学研究・復刊第三二、三三三号・四八頁、五三頁）、それ以外の常備委員の氏名は、残念ながらわからない。

(2) 明治十五年六月の臨時大会において、「自由党規則」が全面的に改正されることになり、「公撰ヲ以テ諮問一名ヲ置ク」こと、「公撰ヲ以テ常議員七名ヲ置ク」こと、「総理ノ特選ヲ以テ幹事二名ヲ置ク」こと、「地方」において「常備員ヲ撰挙シテ本部ニ出ス」こと、「副総理」を「廃スル」ことなどが議決された。第一期役員の内任（一年）がまだ残っていたにもかかわらず、右の議決をおこない、あわせて役員改選をこの臨時大会でおこなったのは、役員改選時期の「十月ノ本会」を「召集セス」という党の方針があったことによる（「明治十五年六月臨時會議決録」・前掲神奈川県史・各論編1・二二二頁—二二三頁）。役員改選の結果、総理には板垣退助、諮問には後藤象二郎、常議員には馬場辰猪、末広重恭、大井憲太郎、竹内綱、大石正巳、林和一、北田正董がそれぞれ選出され、幹事には鈴木舎定、宮部襄が「特選」された（前掲議決録）。もっとも、臨時大会閉会直後の六月三十日、自由党が京橋警察署に提出した役員名簿には幹事鈴木舎定のかわりに林包明の氏名が記載されている（「東京日日新聞」・明治十五年七月三日付）。鈴木が途中で幹事を辞任したことは、岩手県盛岡市の願教寺境内にある「鈴木舎定君碑」に、「十五年五月。本部之會。君赴之。見撰為幹事。其八月。父之訃至。君乃解職。還盛岡」とみえることによつて疑いのない事実であるが、しかし、彼が辞任した時期については、それが六月中であったことを示す前掲警察提出名簿と八月中であったことを示す右記碑文との間に若干のくいちがひがある。なお、常備委員については、「自由党本部報」・明治十五年十月八日付に、山際七司、長坂八郎、森脇直樹、河野広中、佐藤貞幹、志内一雄、深尾重城、内藤六四郎、加藤平四郎、前田兵治、斉藤圭次の十一名が記載されており（前掲神奈川県史・各論編1・二二八頁—二二九頁）、ここでは、彼らが第二期常備委員（明治十五年六月以降）に就任したものと推測しておく。

(3) 明治十五年九月、板垣外遊をめぐる党内抗争が勃発し、同年十月はじめ、外遊反対派の馬場辰猪、大石正巳、末広重恭の

三常議員が罷免されるという事件が発生した（拙稿「板垣退助の外遊と自由党」・政治学論集・第二号・昭和六十年九月・二九頁以下参照）。三常議員の後任に選ばれたのは、明治十五年六月の臨時大会の役員選挙で次点となった島本仲道以下、片岡健吉、林包明の三名である（「自由党本部報」・明治十五年十月八日付・前掲神奈川県史・各論編1・二二八頁）。彼らがくり上げ当選となったのは、そうすることによって、大会を開くことなく新常議員の補充が可能であったからであろう。しかし、右のうち、片岡の氏名は、この当時作成されたと思われる「自由党盟約」（東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵パンフレット）所載の役員名簿にみあたらないので、ここでは、彼が新常議員に就任することはなかったものと推定しておく。なお、常議員三名の更迭人事と前後して、幹事鈴木舎定が林包明に交代し（註2・参照）、また、常備委員志内一雄、深尾重城の兩名が辞任する一方、小林樟雄がこれに就任するなど、いくつかの人事上の移動があったが（「自由党本部報」・明治十五年十一月二日付・前掲神奈川県史・各論編1・二二九頁―三〇頁）、これは、党内抗争事件とは無関係であろう。

(4) 明治十六年四月二十三日にはじまる定期大会において「自由党規則」の改正が、再度検討されることになり、常備委員を廃すること、常議員選挙委員十五名を選挙し、その協議によって常議員（十名以上三十名以下）を選出すること、総理は今回にかぎり改選しないこと（板垣が外遊中であることを考慮したものであろう）、などが議決された。まず、常議員選挙委員には、星亨、鈴木舎定、加藤平四郎、内藤魯一、宮部襄、北田正董、前田兵治、堀越寛介、西山志澄、新井章吾、大石正巳、青木祥太郎、内藤四郎、松村文次郎、山脇鋭郎の十五名が選ばれ、ついで彼らによって星亨、中島又五郎、谷重喜、大井憲太郎、内藤魯一、吉村明道、西山志澄、森脇直樹、鈴木舎定、鶴飼節郎、山際七司、松村文次郎、石坂昌孝、吉野泰造、新井章吾、塩田奥造、宮部襄、長坂八郎、杉田定一、小林樟雄、堀越寛介、園田勇、三宅秀夫、山脇鋭郎、吉原次郎八、山口千代作、磯山清兵衛、沢田寧が新常議員に選ばれた。また、幹事には、前田兵治、加藤平四郎、斉藤壬生雄が選ばれた（「自由党会議之景状・統報」・三島通庸関係文書）。

(5) 明治十七年三月の臨時大会において、「自由党規則」が三たび検討されることになり、常議員を廃すること、総理の指名で常備委員を若干名置くこと、幹事の定員を三名から二名に改めること、などが議決された。役員改選の結果、総理には板垣退助が選出され、諮問には星亨、大井憲太郎、北田正董が、常備委員には鶴飼節郎、鈴木昌司、大井憲太郎、内藤魯一、小林樟雄、高橋基一、森脇直樹などが、さらに、幹事には杉田定一、加藤平四郎、佐藤貞幹が、それぞれ指名された（前掲「自由

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿（寺崎）

党史」・中巻・三六五頁―三六八頁）。しかし、北田正董は、諮問に就任しなかったため、片岡健吉がこれに就任し（前掲書・三六八頁―三六九頁）、また、五月十六日には、諮問兼常備委員の大井憲太郎が辞表を提出するにいった（長谷川昇「明治十七年の自由党―内藤魯一日誌を中心として―」・歴史評論・第六一号・昭和二十九年十二月・一頁）。さらに、その後、月日は明らかでないが、幹事の杉田定一が同様に辞任し、小林樟雄がこれにかわっている（「自由党本部報」・明治十七年九月十八日付・前掲神奈川県史・各論編1・二三六頁）。

(二) 自由党大会出席者名簿

北海道	本多 新	結成大会 ⁽¹⁾ (明治14年10月18日 ―29日) 於東京井生村楼
青森	服部吉之丞	臨時大会 ⁽²⁾ (明治15年6月12日 ―19日) 於東京井生村楼
秋田	狩野 元吉	
岩手	鈴木 舎定 布施 長成 (横浜 慶郎) (高橋 辰治)	定期大会 ⁽³⁾ (明治16年4月23日 ―24日) 於東京井生村楼
	鈴木 舎定	臨時大会 ⁽⁴⁾ (明治16年11月16日) 於東京井生村楼
	山本 忠礼 工藤弥兵衛	
	鈴木 舎定	臨時大会 ⁽⁵⁾ (明治17年3月13日) 於東京井生村楼
	谷地 正通	
	源 繁	解党大会 ⁽⁶⁾ (明治17年10月29日) 於大阪太融寺
	谷地 正通 伊藤 圭介	
	伊藤 圭介 谷地 正通	
	鷗飼 節郎 昆 淳一郎 伊藤金次郎 (伊藤 圭介)	

茨城	福島	宮城	山形
森 隆介 磯山 清平 <small>(兵衛)</small> 栗田 興功 関 信之介 富松 正安 青柳 球平	河野 広中 田母野 秀顕 三浦 信六 大田 弘中	大立目 謙吾 二宮 景輔 高橋 博吉	(長野又四郎) 阿部 信次郎
富松 正安 木内 伊之助 熊谷 平三 渡辺 里八郎	岡野 知荘 奥宮 健之 遠藤 庄象		山田 静麿 鷺田 義則
富松 正安 磯山 清兵衛	松本 茂 □田猪次郎 石井 定□ 佐久間 昌熾 安積 三郎 園部 好幸	藤沢 幾之助	
小久保 喜七 館野 芳之助 富松 正安 関 農夫雄 霜 勝之助 藤田 順吉	宿刈 仲衛		
吉田 保太郎 田口 静之助 木内 伊之助 霜 勝之助 藤田 順吉 長塚源二郎	杉浦 吉副 須藤 喜左衛門 磯目 角太郎 三輪 正治	豊川 痴疑雄	
野上 球平 (磯山清兵衛)		佐藤 珍次	

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

栃木			千葉		
塩田 奥造	湧井 藤七	山口 信治	田中 正造	桜井 静	
岡田 亮太	新井 章吾	塩田 奥造	(野原仙太郎)	桜井 寛	山来 健
(湧井 藤七)	矢島 (中正)	新井 章吾	高梨 和助	井上 幹	野村 括藏
大久保菊次郎	野沢四郎左衛門	岩崎万次郎	佐久間吉太郎	中村 孝	大田和誠一郎
(法木 発)	野沢四郎左衛門	野沢四郎左衛門	佐久間仲次郎	飯田徳三郎	飯田徳三郎
(兵庫代表の誤りか)	塩田 奥造	塩田 奥造	椎名峯三郎	山田幸次郎	山田幸次郎
	関田嘉七郎	関田嘉七郎	高野 麟三	三浦信太郎	三浦信太郎
			吉原次郎八	君塚 省三	君塚 省三
			高野 麟三	石田 直吉	石田 直吉
			岩崎万次郎	椎名峯三郎	椎名峯三郎
			野沢四郎左衛門	三上文太郎	三上文太郎
			野沢四郎左衛門	仙波 兵庫	仙波 兵庫
			野沢四郎左衛門	富松 正安	富松 正安
			野沢四郎左衛門	岩沢 仲通	岩沢 仲通
			野沢四郎左衛門	磯山清兵衛	磯山清兵衛
			野沢四郎左衛門	板倉 中	板倉 中
			野沢四郎左衛門	井上 幹	井上 幹

埼玉	群馬
<p>中島義三郎 吉田暢四郎 保泉 良輔 堀越 寛介 松本 庄八</p>	<p>岡田 亮太 福田定一郎 横堀 三子 (吉沢 兵三)</p>
<p>岡田 正康 山崎平兵衛 平田 嘉吉 山崎祥一郎 岡田健二郎 堀越 寛介</p>	<p>齊藤壬生雄 山下 善之 岡田 三郎 亀山 隣吉 岸 忠夫 (深井 新蔵)</p>
<p>堀越 寛介 平田 嘉吉 目岡 朗 野口 斐 渡辺 湜</p>	<p>田中耕太郎 笹治 元 齊藤壬生雄 深井 新蔵 深井 卓爾 中野 了随 深沢勸次郎 沢田荘太郎 富藤 質三 齊藤 和助</p>
<p>渡辺勸五郎 根岸貞三郎</p>	<p>湧井 藤七 松島 恂三 榎原 経武 深尾 重城 岡田 亮太</p>
<p>加藤藤四郎 野口 斐 板倉喜代平 新井 源八 高岸 善吉 村上 泰治</p>	<p>若田部総七 周藤冲二郎 桑原 静一 金井只五郎 齊藤伊勢吉 伊賀我何人 深井 卓爾 多賀 恒信 神谷 栄吉</p>

神奈川

伊達 時
水島保太郎
成内額一郎
佐藤 貞幹
中村 克昌
(指田茂十郎)
(田村半十郎)
(永嶋庄兵衛)
(中川 良知)
(山本作左衛門)

松本 庄八
吉田暢四郎
中島義三郎
矢部忠右衛門
岡田 順達

林 副重
鎌田 喜三
榎本 重美
井上篤太郎
佐伯十三郎
伊達 時
佐藤 貞幹
水島保太郎
桜井 光興
池田越太郎
薄井 盛善
内山末太郎
深沢 権八
石坂 昌孝
青木庄太郎

中村重右衛門
鎌田 喜三
村松 弁一
吉野 泰造
山本作右衛門
細野喜代之
井上 光治
青木祥太郎

水島保太郎
神谷 温作
鎌田 喜三
深沢 権八
高木 吉造
青木副太郎
山本 與七
細野喜代四郎
中村重左衛門
川崎芳之助
五十子敬斎
中村 克昌
榎戸 源蔵
石坂 昌孝
佐久間勝也
佐藤 貞幹

加藤 善蔵
南 鉞二郎

吉野 泰三
佐藤 貞幹
石坂 昌孝
細川 潤
中村重右衛門
中村 克昌

平野 友輔
山本 興七
石坂 昌孝

東京

宮田茂八郎
倉長 恕
矢野 駿男
馬場 辰猪
林 正明
大江 暹
竹内 綱
大石 正巳
龍岡 信熊
山口直太郎
長 八次郎
後藤象二郎
中島 信行
末広 重恭
高橋 基一

大井憲太郎
北田 正董
中島又五郎
堀口 昇
末広 重恭
馬場 辰猪
村山 儀七
伊藤 喜久
小野 久鹿

末広 重恭
大石 正巳
星 亨
西村 玄道
馬場 辰猪
大井憲太郎
島本 仲道
北田 正董
宮部 襄
前田 兵次
加藤平四郎

井上 光治
本田 定平
本多 幾多
市倉房太郎
吉野 泰三
原田慶次郎
星 亨
大井憲太郎
松尾清次郎
植木綱次郎
小島 官吾
仁杉 英
竹内 綱
中島又五郎

武藤 直中
松尾清次郎
高橋 基一
北田 正董
山田 泰造

佐藤 貞幹
小林 樟雄
(高橋 基一)
(大井憲太郎)

山梨	長野	新潟
佐伯 剛平 西村 玄道 伊賀楊太郎 浅野 乾 小田切謙明 幡野 弘毅 古家 平作 古家 太作	山際 七司 八木原繁社 赤沢 常容 (柿本 勤)	
	加藤 勝弥 小田嶋儀一郎 山際 七司 富樫 猪吉 山添 武治 八木原繁社	
	石塚 重平 小林秀太郎 遠藤政治郎 桃井伊三郎 官尾 四郎 松村文次郎 木村 順三	
綿貫市太郎 古谷 平作 神山 亮	石塚 重平 早川 権弥 小林勝右衛門 江村 正綱 富田 精策	
	桃井伊三郎 加藤 貞盟 鳥井 和邦 鈴木 昌司 今泉富次郎	
柳沢 五郎	山崎 原三 新喜太郎 本間 某 (藤作) 森山 信一 猪俣 羽作	

石川	富山	福井	静岡	愛知
(中村 義聞)		松村 才吉		内藤 魯一 太田松次郎 相馬 政徳 村松 愛蔵 荒川 定英 庄林 一正
		内田甚右衛門	土居 光華 曾田愛三郎 深浦藤太郎 古郡 米作 志内 一雄	庄林 一正 今村十七枝 河合 開一 内藤 魯一 平岩 隆三 吉田 道雄
			中野次郎三郎 (二) 柳 英奥	荒川 定英 庄林 一正 川合 開一 川合文次郎 中島 喜三 松村 ^(村松) 愛蔵
	稲垣 示	杉田 定一	沢田 一郎	遊佐 発
		杉田 定一	鈴木 音高	
棟柴 芳暎	稲垣 示 金瀬 義明 釜田 喜作 広瀬 鎮之 清水豊四郎	安立又三郎		宮田 仁造 村雨案山子 平岩 隆三 相馬 政徳 吉田 道雄 内藤 四郎

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

奈良	和歌山	三重	岐阜
	藪内平次郎		岩田 徳義 早川 啓一 洪谷 良平 (今村十七枝) △林 文三郎△ △後藤文一郎△
			永田 英 井村輝太郎 鷺野繪太郎 早野 拓尔 大場 小哉 安田 節藏 菅井三九郎
			内藤 四郎 市古 春平 野々山礼作 内藤 魯一 杉浦 善七 白井 菊也
森田 秀吉	土橋 秀吉 稻辻 秀重	今村政次郎 山口 俊太	(内藤 魯一) (伊藤平四郎)
		服部富之助 後藤輔三郎 石井 四郎 上出 又吉	山本吉兵衛 菅井三九郎 堀部松太郎

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

滋賀	京都	大阪	兵庫	岡山	広島
藤 公治		青 山 薫	筒井 弁治 山脇 鋭郎	加藤平四郎 小林 樟雄	守下 薫
藤 公治			真野 方郎 山脇 鋭郎	中山嘉代治 竹内 正志 加藤平四郎 立石 岐	
		天野 鉄助	山脇 鋭郎 安井 □		
		勝山 孝三		加藤平四郎	
				小林 樟雄 山崎 弥平	
吉村大三郎 玉重 格	溝口市次郎 堀内 辰 田中 直亮 田部 敬信 安田音四郎	八代 大輪	堀格 太郎 植木 致一	中山喜代次 ^(嘉) 直原 守次	戸谷 正寛

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

高知	香川	愛媛	徳島	山口	鳥取	島根
児島 植木 島 枝盛 稔		山本 隆徳	前田 兵次 <small>(海)</small>		村上 謙 飯田 千蔵	園山 勇 小原 鉄臣
谷 片岡 重中 健吉		藤野 正高 皆川 広済	前田 兵次 <small>(海)</small>		岡島 正潔	園山 勇 小原 鉄臣 藤井 誠
竹村 西山 太郎 志澄		二ノ宮重義				大河原毎太郎
片岡 健吉			横山嘉太郎 桜間 登			
片岡 健吉			前田 兵次 <small>(海)</small>			
寺田 川本 栄実 篤馬	福本 資弘	(藤野 正高)	(前田 兵次 <small>(海)</small>)	松本 惟繁	小原 鉄臣 米田 和一 小川寅一郎	寺井文次郎 益田 本郷 益田 邦吉

福岡	吉田 柄次郎 桑野 銳 立花 親信 (立花 通誠) (郡 利)	林 包明 浜田 三孝 △山田平左衛門▽
長崎	(武富 陽春)	林 包明 島本 仲道 竹内 綱
大分	笹部 甕雄 上田長次郎	笹部 甕雄
	(桑野 銳)	谷 重喜 小笠原 廉太郎 杉本 清寿 (安芸喜代香) 安喜 清香 (青) 春木 茂樹 弘瀬 重正
		荒尾 (寛應) 角造 下元 正樹 前田 南山 西山 志澄 片岡 健吉 植木 枝盛 森脇 直樹 奥宮 健之 小島 稔

自由党役員名簿と同党大会出席者名簿(寺崎)

熊本	宗像 政				
鹿兒島	柏田 盛文 宇都 純粹 隈元 禎三				
不明	△大塚 純一▽ △山口真次郎▽				

(1) 明治十四年十月十八日にはじまる自由党結成大会（第一回大会）の出席者名簿としては、(一)「朝野新聞」・明治十四年十一月六日付に掲載されている名簿、(二)「高知新聞」・明治十四年十一月二日付に掲載されている名簿、(三)関戸覚蔵「東陞民権史」・明治三十六年・八〇頁―八四頁に掲載されている名簿、(四)前掲「自由党史」・中巻・八一頁―八四頁に掲載されている名簿などがある。各名簿間には若干の異動があるが（その異同の詳細については、江村栄一「自由党結成再論―自由民権史論の一環として―」・経済志林・第四八巻第四号・昭和五十六年三月・六八三頁―六八七頁参照）、ここでは、(一)を底本とし、他の諸資料によってこれを補った。なお、(一)を附した氏名は(二)により、(二)を附した氏名は(三)により、これを補ったことを示す。

(2) 明治十五年六月十二日にはじまる自由党臨時大会（第二回大会）の出席者名簿としては、(一)「樺山資紀文書」所載の「自由党臨時会出席人名簿」（全文は、安在・前掲「自由党結成後の党組織化の動向」・早稲田大学大学院文学研究科紀要・第二八輯・二九六頁―二九七頁、拙稿「自由党の成立（明治十四年）と自由党地方部」・近代日本史の新研究Ⅱ・昭和五十九年七月・一八六頁―一八八頁参照）、(二)「小柳卯三郎文書」所載の「臨時会出席人名簿」（全文は、前掲神奈川県史・各論編1・二一〇頁参照）、(三)「朝野新聞」・明治十五年六月十一日付に掲載されている名簿（「三島通庸関係文書」所載の名簿は、この記事

から転写されたものと考えられる)、の三種類がある。各名簿間に若干の異同があるが、ここでは、(一)を底本とし、他の諸資料によってこれを補った。なお、(一)を附した氏名は(二)によって、これを補ったことを示す。

(3) 明治十六年四月二十三日にはじまる自由党定期大会(第三回大会)の出席者名簿としては、(一)「三島通庸関係文書」所載の「今回自由党総会ニ付出席人名」、(二)「朝野新聞」・明治十六年四月二十五日付に掲載されている名簿などがある。各名簿間には若干の異同があるが、ここでは(一)を底本とし、(二)によってこれを補った。なお、(一)を附した氏名は(二)により、これを補ったことを示す。

(4) 明治十六年十一月十六日に開催された臨時大会(第四回大会)の出席者名簿としては、「自由新聞」・明治十六年十一月六日付、十七日付に掲載されている「出京並出會人名」(全文は、前掲「自由党史」・中巻・三五八頁―三五九頁参照)以外、みあたらない。ここでは、この名簿を利用した。

(5) 明治十七年三月十三日に開催された臨時大会(第五回大会)の出席者名簿としては、「自由新聞」・明治十七年三月十二日付に掲載されている「自由党会議出席員」(全文は、前掲「自由党史」・中巻・三六三頁―三六四頁参照)以外、みあたらない。ここでは、この名簿を利用した。

(6) 明治十七年十月二十九日に開催された自由党解党大会(第六回大会)の出席者名簿としては、(一)「自明治十五年
至同十七年機密探偵書(一)」所載の「大坂ニ於テ開ク自由党秋季会ニ合セシ人名」(全文は、井出孫六・我部政男・比屋根照夫・安在邦夫編「自由民権機密探偵史料集」・昭和五十六年十二月・三五八頁―三五九頁参照)、(二)「自由新聞」・明治十七年十月二十九日付に掲載された「大坂会議出席人員」(全文は、前掲「自由党史」・下巻・七六頁―七七頁参照)の二種類がある。ここでは、(一)を底本とし、(二)によってこれを補った。なお、(一)を附した氏名は、(二)によってこれを補ったことを示す。